会議・視察報告

羅先経済貿易地帯出張記

ERINA 調査研究部主任研究員
三村光弘

2017年2月27日～3月4日の日程で朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）の羅先経済貿易地帯を訪問した。今回の訪問は、羅先経済貿易地帯の現状とこれからの対外経済関係の方向性についての中国の吉林大学東北アジア研究院との共同調査プロジェクトが主な目的であった。

羅先への入国

2月27日は午後に中国・吉林省の圏河税関から豆満江を渡り、羅先市の元汀税関に入った。閑散期のため、徒歩での越境が許されない国境で、2つの税関を結んでいるバスがなかなか来ず、仕方なく一行4人のうち2人が北朝鮮を訪れる中国人ビジネスパーソンの車に便乗して北朝鮮側に渡り、バスを呼びに行った。

すでに新しい橋が完成していたが、中国から北朝鮮に向かう車線（上流側）の橋脚が2016年夏の水害の影響でずれてしまっていたため、上下2車線ずつのはずの橋が、下流側の橋を双方向で利用するようになっていた。鋭意修復工事中とのことであったので、春から作業を始めて、夏には復旧するのではないかと思われる。片側相互通行とはいえ、橋の幅は広く、路面も平滑であったので、かなりの高速で通行することができる。大型車の通行も全く問題ない。

元汀税関も新しい橋の開通に合わせて新しい建物となっていた。荷物検査場も拡張され、X線検査機が増え、ずいぶんと洗練された雰囲気になっていた。元汀税関の荷物検査は通行するビジネスパーソンが多いということもあり、平壌や新義州よりも厳しい。携帯電話（中身も写真やビデオを中心にしっかり見る）と身体検査は国境警備隊の仕事で、これが一番厳しい。次に税関だが、以前であればX線検査が終了してから荷物を全部開けて調べていたのが、最近ではめぼしいものだけをピックアップして検査するようになっており、検査時間は以前よりも短縮されている。カメラやコンピュータ、タブレットなどと、USB メモリや外付けハードディスク、CD、DVD などの記憶媒体と出版物（本、雑誌、パンフレット等）は出版物検査の対象となる。パスワードをすべて解除して中身を検査される。記憶媒体はパソコンにつないで調べるのだが、多くの人々の USB メモリをチェックしているため、たいていウィルスに感染している。検査から返ってきた USB メモリやハードディスクは、まずウィルスチェックしてから使用しないと、ウィルスに感染することになるので注意が必要である。

羅先市内視察

羅先市内では、市内の住民便宜施設や市場、港などさまざまな施設の視察を行った。今回も体育館を視察したが、退勤後にスポーツを楽しむ羅先市民がかなり多いことに気づいた。体育館は有料かつ人民元建てでそれほど安くはないが、それでもグループでやってきたり、個人的にレッスンを受けたり、さまざまな形で余暇を過ごす人々の姿に触れられたのはよかった。

羅津港の視察では、今回はロシアが管理する第3埠頭には入構できなかったので、第1、2埠頭の視察に止まった。

羅津港の第1、2埠頭は現在、北朝鮮が管理しており、中国企業が上海と結ぶコンテナ航路を運営している。その他、初代「万景峰号」も停泊しており、こちらはロシア・ウラジオストクとの間で定期航路を運営する予定で、そのために使われるとのことであった（その後、ロシアの運営会社からアナウンスが出た［http://rajin-investstroytrest.ru/66-prilozhenie_2.1.html］（ロシア語））。

羅津港第3埠頭を経由したロシアから中国への石炭輸送は平常どおり行われており、市内視察中に石炭を輸送する列車を数回目撃した。

写真1　羅先市の体育館

（出所）筆者撮影

写真２　羅津港第３埠頭の荷役作業の様子

（出所）筆者撮影

写真３　「海岸館」カフェのカフェラテ

（出所）筆者撮影

写真４　カフェの飲み物メニュー

（出所）筆者撮影

写真５　カフェのスイーツメニュー

（出所）筆者撮影

冷麺店経営のおしゃれなカフェ

羅先市の海辺、海岸公園の入り口近くに国営の冷麺店「海岸館」がある。味は平壌の玉流館と比べると麺がもっちりしており、独特の味。スープの味は人工的な感じはしないが若干薄めである。この大型冷麺店が経営するカフェが羅津駅と黄金の三角州銀行を結ぶ市内中心部の目抜き通り沿いにある。

コーヒーやアメリカーノ、カプチーノ、カフェラテなどは中国の人民元建てで18～25元（日本円で270～375円）である（羅先経済貿易地帯は特殊経済地帯（いわゆる「経済特区」）で人民元の流通が許されている）。その他、ワッフルやパフェといったスイーツも種類が豊富で、30～40元（日本円で450～600円）程度だった。何種類か試してみたが、味は割とよかった（平壌の一流店のように、龍城食品工場製の本物の生クリームを利用したりはしておらず、おそらく中国から輸入したであろう、植物油使用のホイップクリームだったのが少し残念だったが）。

羅先からの出国

羅先からの出国は、2017年3月4日に豆満江駅から平壌発モスクワ行きの国際列車に乗って、ロシア・ウスリースクに向かった。列車の出発時刻は15時00分で、出国のための税関手続きは13時30分頃に始まる。羅津地区にあるホテルを9時40分に出発し、11時30分過ぎに豆満江駅前に到着。出発まで時間があるので、駅前のフナ料理屋さんで豆満江名物フナの鍋を食べた。これは近くにある東藩浦や西藩浦といった湖でとれる新鮮なフナを個人別の小さな鍋に入れて煮て食べる料理で、秘伝の薬味のおかげでほとんど泥臭さを感じない名料理である。この食堂の一室で国際列車の乗車券の発券が行われており、共同調査のパートナーである吉林大学の先生がチケットを発券しに行った。食堂は暖房が効いていないが、チケットの部屋は暖かく、料理ができるまでの間、居候させてもらった。

豆満江駅での出国のための税関手続きは、まず税関検査から始まる。X線検査機は設置されているが、使うことはなく、検査台ですべての荷物を開披して検査を行う。入国時と同じく、カメラやコンピュータ、タブレットなどと、USB メモリや外付けハードディスク、CD、DVD などの記憶媒体と出

版物（本、雑誌、パンフレット等）は税関とは別に出版物検査を受け、身体検査と携帯電話の中は国境警備隊が検査をする。検査時間は人によっても違うが、10～20分程度であろうか。これが終わると出国手続きを行い、ホームに出て列車に乗り込む。

これまでも何回か豆満江駅から出国したが、これまではすべてロシア鉄道の車両と乗務員による運行だった。今回は珍しく、月に2回しか走っていない北朝鮮鉄道の車両と乗務員による平壌～モスクワの直通列車に乗った。車輌はコンパートメント式の一般寝台（ロシアのクーペ、中国の硬卧包厢に相当）で、エアコン付きであった（まだ冬なので、暖房中であったが）。

15時00分、ほぼ定刻に出発し、駅構内で2回場所を変えて停車する。そのたびに車輌の周囲を検査しているようだ。その後、やっと出発し、朝ロ友好橋を超え、ロ朝友誼閣の前で一端停車する。ここで車輌の下部をくまなくチェックする。国境警備隊が乗り込んできて、ロシアの入国カードを配り始める。しばらくしてから、ハサン駅に到着する。距離的には2.5キロほどだが、この厳しいチェックのために45分かかる。

ハサン駅到着後、ハサンで下車する客は、駅構内の施設で入国、検疫、税関の手続きを行うので、先に下車する。ハサンより先、モスクワまでの各駅まで乗車する客は、車内での検査となる。まず、国境警備隊がコンパートメントを回る。この際、客は自分のコンパートメントにいなければならない。パスポートと記入済みの出入国カードを渡すと、次は税関職員がやってきて、現金や酒、タバコそれに麻薬の有無などを質問される。メンバーの一人がたくさんタバコを買い込んでいたので、それを指摘され、税金を納付する旨を伝えると、面倒くさいのか、「今回は正直に申告したので、特別に持ち込みを認めます」と言われていた。税関検査は一人一人の荷物を開披することになっている。その際に、検査されないコンパートメントの他の客は廊下に出て待たなければならない。今回はそれほど厳しくチェックはされなかった。

到着後1時間弱経ってから入国スタンプが押されたパスポートが返ってくる。これから発車時間のモスクワ時間11時45分（ウラジオストク時間の18時45分）までは車外に出ることが許される。

列車は定刻に出発し、途中何駅か停車した後、モスクワ時間18時14分（ウラジオストク時間翌日の1時14分）にウスリースク駅に到着した。